
時と空と空想と

剣杖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と空と空想と

【Nコード】

N5224S

【作者名】

剣杖

【あらすじ】

この物語は、テンプレで少女を救った男が、チートを開眼させて転生する物語です。

初めての投稿なので、誤字脱字が多く、文才が皆無ですが頑張っています。

プロローグ（前書き）

初投稿なので、見にくいかもしれません。

プロローグ

此処は何処だ？暗くて何も見えない。

[illegible]

その後、俺は痛みに耐え切れず、意識を失った。

さて、俺は、いま強烈に困ってる。

なぜかって？それは「すまんかったー！」っと、土下座して謝ってくる、変「すまんかった」じいさんが居「このとおり」って、うつせえー！

「で、あんたは誰で、此処は何処なんだ？」

見渡す限り何もない、真つ白な世界……。

うん、本当どこだ此処。

「うむ、此処は神の領域と言う所で、わしは神じゃ。」

はあ？神？大丈夫かこのじいさん。ボケたの「ボケとらん！正真正銘神様じゃ」うおっ！心読まれてる！

「当たり前じゃ、神としては当たり前のSkillじゃ！」

無駄に、英語の発音がいいのがむかつく……。

「なんで、俺はここにいるんだ？神が居るということは、死んだのか？」

「そうじゃ、おぬしはトラックに引かれそうな女の子を助け、代わりに引かれ死んだのじゃ。」

自分自身にテンプレが起こるとは、想像もしてなかった（泣）

「そうか、あの娘は助かったのか？」

大丈夫かな？強く押しちゃたからなあ。

「それは大丈夫じゃ、怪我一つないぞ。」

よかったゝ 助けたのに、怪我してたら嫌だからね。

「それで、おぬしには転生して貰う。

特典として、3つまで願いを叶えるぞ。」

特典ね。うーん何にすっかな、『無限の剣製』はありきたりだな、

『王の財宝』これも同じだし、あっ！そういえば！

「神様、ここにくる前に、暗いところに居ただけだ。あそこって何なの？何か、すごく痛かったけど。」

「まことか！ちよいとみせてみよ。」

何だかめっちゃ驚いて、俺の頭に手をかざしてきた。

何これ？すげえ怖い。

「…………ふむ、おぬし根源に、到ったようじゃ。」

「……………は？根源って、型月の『根源』みたいなもの？マジで!？」

「本当じゃ、万物の始まりにして終焉、この世の全てを記録し、この世界の外側。

ちなみに、おぬしには『時空の魔眼』という物がやどっておるぞ
すげえチートだな…………。

「副作用はあるのか？」

「いんやあ無いぞ、使う時に魔力を消費するぐらいじゃ。」

まあ、これぐらいは当たり前だな。

「では、転生の特典を決めてくれ。」

だったら『時空の魔眼』をメインにして…………。

「じゃあ1つ目は、この眼に耐えられる剣。2つ目は、型月の空想具現化。3つ目は、全ての武器の練習方法で。」

「……ふむ。1つ目と3つ目はいいが、空想具現化は固有結界と成ってしまうがいいかの？」

俺は真租みたいに、星の触覚じゃないしな。

「いいですよ。ちなみに、どこに転生するんですか？」

「ネギまの世界じゃ。それとおぬしの気を、ラカンと同じに。魔力を木之香の5倍にしたぞ。」

この時点で、すでにチートだな。

「では、そろそろ転生するでしょう、剣は付いてから届くからな。」

パカッ！

俺の足元に穴が開いた！

うわああああああっ！！

「なんでこうゆう行き方じゃややややややー！！」

「これは、おぬしの世界の一般常識なんじゃろ？」

それに、孫を助けてくれてありがとう。良い人生を生きてくれ。」

「テンプレだけど！！一般常識じゃねええええええええええ！！」

この神様（笑）がああああ！！

S i d e 神

……ふむ、行ったようじゃの。

何が神様（笑）じゃ！

孫を助けてくれたからの、もっと特典をあげたかったが。
そうすると、あやつらがいろいろうるさいからの。

「御祖父様、あの方は行ってしまったのですか？」

「ああ、いまさっき転生したぞ」

「そうですか、お礼を言いたかったのに」

「次会った時、言えばよい。」

「……そうですね。」

頑張るのじゃぞ、

剣城時亜
けんじょうときあ

プロローグ（後書き）

読んで下さってありがとうございます？

作者はまだ書き慣れていないため、しばらくは不定期になります。

読んで下さった、読者様に感謝を

第1話 剣と修行と異世界（前書き）

短いです……

これから頑張っていきます。

第1話 剣と修行と異世界

「——知らない天井ですらない」

空は青く、俺は何も無い荒野に寝ていた。

「本当何も無いな《カサツ》ん？何だこれ、手紙か？」

俺の足元に手紙が落ちていた、

『おぬしがこれを読んでいるということは、無事に転生したということじゃ。』

さっき言つといた剣のことじゃが、今、着けている指輪がそうじゃ。
その剣の名は、根源剣イクス・アンリと言つ。能力は、お主の魔力に堪えられて、
形が自由に変えられる剣じゃ。

PS、固有結界のせいで、ネギまの魔法は使えんからの、気をつけるのじゃ。』

はあまじ！？、魔法使えないのかよっ！

……まあいいか、魔眼に空想具現化使えるし（泣）

「それにしても、これが剣か……、ただの指輪にしか見えないけど。」

（じゃあ、まず剣にしてみるか、）《シュン》

「スゲー綺麗な剣だな……、水晶で出来てんのかな？
よしっ！それじゃ修業でもするか！」

あつ、でもあんま時間無いしな、別荘があつたらよかったのに。
うーん……………そうだ！魔眼で作ればいいじゃん！

「えーと、まず空間を作つて……、時差は……半年が30年でいいか、よしできたっ！」

んーあとは、おれを不老にして……よしいくか！

第1話 剣と修行と異世界（後書き）

よっしゃー？1話投稿です。

書けたけど、プロローグより短いつてどうよ…… ONN

まあ気にしませんよ？

第1話見てくださって、ありがとうございます。

第2話 思考と錯誤と30年（前書き）

第2話投稿です？

まあ……短いですけど

第2話 思考と錯誤と30年

俺が入ったのは、何も無い空間だった。

「さて、不老にはなったから歳をとる心配は無いし……、修行を始めるか。」

まずは、基礎訓練と魔力と気の効率的運用かな？
空想具現化とかは、また後に回すかな。

〱一ヶ月経過〱

ある程度基礎が出来てきてきたし、そろそろ武器の練習でもするか。
魔眼もいろいろ試して、時間の方は、加速、遅延、停止、空間の方は、固定、移動ぐらいならできるし。

剣の形に固定したやつを、放てば魔法の矢ぐらいの威力だし。

その後、ブロークンファンタズムみたいに、魔力を爆発させたら結構威力があった。

「1年経過」

結構時間経ったな。空間剣も一気に千本くらい出せるようになったし、瞬動も虚空瞬動もなりなした。

今武器は、剣を練習しています。剣が終わったら、槍、短刀、斧、などやっていきたいと思う。

「10年経過」

なんか物凄く時間が経ちましたねー。

今は、剣の他にも、槍、短刀、斧、矛、拳、鋼糸など沢山練習しました。

魔眼の方も更に、時間逆行、空間歪曲が出来るようになりました。

逆行の方では、フラガラックが出来ました、めっちゃ嬉しかった！！

歪曲の方は、ふじのんみたいに「凶がれ」をやってみました。

この調子でやっていたら、ゲイボルクも出来るかもしれません。

めっちゃネタにはしってるな、
今度は固有時制御でもやってみるか……。

く20年経過く

更に10年経ちました。

今は、主に空想具現化を練習しています。

月墮しやグナーデン・シュトースを放ってみたりして、とても感動しています。

そうだ、この前練習中に腕がちぎれたので逆行で治したんですけど、これがなかなかめんどくさいんです。

だから自分の体を、魔眼で固定して死んだとしても時間逆行して、戻るようにしました。

だから、直死で点を突かれなければ、死なないと思う。

そのほかは、オリジナルの技の練習をしていたり、
あつ！そうだこの前、神（笑）から連絡がきて

『平行世界の移動と時間旅行が出来ないが、因果の書き換えは出来るぞ』と、言ってきました。

これedyouやく、ゲイ・ボルクができるっ？と喜んでいましたが…

…、
因果書き換えは時間がかかるし、魔力も大量にようなので、あまり
使えません（泣）

まあ逆行で応用すればいいや……………ちくしょう。

まあ後10年ありますし、がんばっていきましょう。

…30年経過…

やってきました？修業終わりの年です！

いや…長かった、何度体がバラバラになったことか…………グスッ。

ともかく？完成した技は、主人公設定で見てください

え…………メタ？気にしません！

では、そろそろ外に出ますかな――。

「うはー？久しぶりの外だーっ？なんかしゃべったのも、久しぶりだし」

あー空気が旨いな、早くナギ達に会いたいし《ぐ》ん？

それにしても腹減ったな。まず、町をさがすかな。

「おい！そこのお前」

ん？あれはっ！？

そこには、ナギ・スプリングフィールド達、紅き翼がいた……。

（おれ……フラグたてたかな……？）

第2話 思考と錯誤と30年（後書き）

第2話見てくださってありがとうございます？

まだまだ未熟なのでがんばっていきます。

次回からは、どんどん長くしていけたらいいなあと

では！見てくださった読者様に感謝をこめて、さようなら！

第3話 俺とナギとバトル（前書き）

すみません！いろいろ考えてる内に結構掛かってしましまして。
今回の戦闘描写は、あまり良いとは言えません。
でもよかったら見てください。

第3話 俺とナギとバトル

S i d e ナギ

俺の名前は、ナギ・スプリングフィールド。

今、帝国との戦いが終わって町に一旦戻るとき、急にバカでかい魔力が現れやがった。

こんなでかい魔力の奴は連国には居ないし、そうすると帝国の奴か？ そうなると少しやばいな、近くだしちょっと試ってみるか。

近くに来てみると、そこには誰か立っていた。

「……あの方みたいです、この魔力は」

アルがそう呟いていた。おもしれえ。

「お前らあ、手だすなよ！」

「危険です！ ナギ！！」

アルがなんか言っていたがきにしねえ。

「おい！ お前」

「ん？」

そいつが少し驚いてこっちに、振り返ってきた。

「お前、帝国の人間か？」

「いいや違う、俺は帝国でも連国の人間じゃない」

まあ、嘘ついている様子はねえみないだから、本当だろうな。

「じゃあこんなところで、何してたんだ？」

「んー……、まあ強いと言ったら、修行だな」

「へえーおもしれえ、じゃあいつちよやかあ！」

「おう！いいぜ」

久々に本気で戦えるぜ！あつそうだ。

「俺の名は、ナギ・スプリングフィールドだ」

「俺は、剣城刻亜」

じゃあ――

「「いくぜえ！！」」

S i d e 刻 亜

最初の実戦だ。相手は後の英雄ナギ・スプリングフィールド。
あちらは何度も戦って実戦経験は、修行だけの俺より上、いくらチ
ートだとしても油断してたら負ける。

だから本気で立ち向かうのみ！

「いくぜ！千の雷」

いきなり千の雷か！くそっ！かわせない、だったら。

「空間固定、範囲前方、5重結界」

パリン！パリン！パリン！パリン！パリン！

固定した空間が全部破壊され、雷が到達した。

「くっ！さすがに即興じゃ完全に防げなかったか」

本来なら、数十枚と魔力を込め固定するからな。

「へっ、そのかわりほとんどダメージねえじゃんか」

「まあな、俺の力は攻撃より防御や補助の方に適性があるからな！」

歪曲はまだしも、停止、加速、固定などは攻撃じゃないからな。

「今度はこっちからだあ！空間剣5百本固定、ソードバレルフルオープン全空間連続掃射！！」
全部で5百本の剣を、ナギに向かって発射する

「おっと！ちい、あぶねえ！」

ナギは瞬動を使ってかわし、こちらに向かってくる。

「おらあ！」

「はあっ！」

俺が剣で切り付け、ナギがそれを魔力で纏った拳や杖で防ぎ、殴りつける。

「ぐっ！はあっ！」

「何！？つがああああ！」

ナギの拳が当たる直前に、イクスを大剣に変えギリギリ防ぎ、ナギを吹き飛ばした。

「はあはあはあ……、なんだその剣、いきなり形が変わったぞ？」

「戦っている相手にいちいち教えるか？」

「へっ！それもそうだ。魔法の矢・雷の1001矢っ！」

大量の魔法の矢が襲い掛かってきた。

「今度は完全に防いでやる。空間固定・範囲前方・10重結界」

よし今度は完全に防げたか……、ってナギがない？

「はあああつ！雷の暴風！」

っ！上！？しまった！！

「がああああつ！」

雷の暴風が俺に直撃した。

体中が痺れる、だが時の逆行のお陰ですぐに痺れは消えた。

「どうだ！降参するか？」

「へっ！まだいけるぞ！」

そう言ってきたが、俺は立ち上がり剣をむけて言った。

「そこなくっちゃな！」

ナギは嬉しそうに言っていた。

俺はその瞬間、空間移動でナギの後ろに転移し切り付けた。

「はああああつ！」

「っ！？ちいいい！」

ちっ、ぎりぎり直撃は回避したか。
だが、このまま押し進める！

「おらおらおらおらあっ！」

「なっ、ちい、ぎい、はあっ！」

ナギも杖などで防いでいるけど、こちらは加速を使っているため少しずつ傷が増えている。

「くらえっ！空断之剣！」

「何！？ぐっああああっ！」

俺が放った斬撃は、ナギの防御を無視して切った。

その後、何回も俺達は切り合い、打ち合い疲弊していった。

「これで終わりにするぜ！！」

「ああ、いくぞっ！」

ナギのその言葉に、俺はイクス・アンリに魔力をこめた。

「契約により従え高殿の王、来たれ巨人を滅ぼす燃えゆる立つ雷霆、
百重千重と重なりて走れよ稲妻——」

ナギは自分の持つ最大の魔法《千の雷》の詠唱を

「混じり合え！時空よ——」

俺は自分の持つ、最大の一撃のための魔力を溜める。

「千の雷！！」

「星断之剣！！」

それは、千の巨大な雷と星をも断つ斬撃の衝突

お互いの最大の一撃は、ぶつかり合い爆発した。

俺はその衝撃で飛ばされた。

「ぐあっ！い、つつ……、はあくまk「いいえ、引き分けですよ」へっ？」

そこには胡散臭い笑みを浮かべた、アルビレオ・イマがいた。

「どうして引き分けなんだ？」

俺は疲れと空腹で動けないから、このまま負けだと思っのに。

「ナギは、あちらで気絶していますからね、それで引き分けなんですよ」

「そうか……、えっえ」と「アルといいます」じゃあアル、すまんが飯《ぐ》を……」

「フッフ、ナギが起きるまで、あちらで一緒にいかがですか」

「……ご馳走になる」

くそっ！飯にはありつけるが、なんかめっちゃ悔しい！

S i d e アルビレオ

最初この人を見たとき、その魔力の大きさに危険を感じました。

「お前らあ、手だすなよっ！」

ここは一旦様子を見るべきでしょう。
と思っていたとき、ナギが飛び出していきました。

「危険です！ナギ！」

私が言っても、止まらずいつてしまいました。

ナギが彼と話ています。ふむ……、少なくとも彼は帝国の人間では無いようですね。

「ゼクト、詠春、彼は少なくとも帝国の人間ではなさそうですね」

「うむ、そのようじゃな。」

「そうだな。あとアル」

ん？どうしましたか、詠春？

「ナギが戦闘を始めようとしているんだが……………」

詠春が額に手を当てて言っていました。

………… ふむ、彼の實力も解る醸しれませんし、ナギに任せましょうか。

「少し、ナギに任せて休んでいましょう」

「それもそうじゃな」

ゼクトと話していると、ナギがいきなり千の雷を放ったようです。

「ふむ、あちらもやりおるのう。千の雷をくらっても、ほとんどダメージ無しじゃ」

「それに、あの障壁は普通のとは違いますね。」

「ああ、壁を生み出したという感じだった」

それに、何本も出した半透明の剣もまるで”空間”から生み出したという感じでしたね。

「ナギの雷の暴風が直撃した！」

「雷の1001矢を囷とは、バカなりに考えるのう」

ナギも成長しているということでしょう。

しかし彼も凄いですね、雷の暴風の傷が完全に回復しています。

「むっ転移ですか、しかも彼先程よりかなり速くなっていますね」

「そうじゃのう、じゃが少なくとも強化魔法ではないのう」

「ああ、それに気を使った強化でもない」

フッフ面白い方ですね彼は。

「今、あやつの斬撃が、ナギのす防御をすり抜けたのう」

「詠春何か解りますか？」

「いや、私の流派に切る物の選択をする技があるが、それとは違うようだ。」

「そうですね……、そろそろ終わるようですね」

そして、ナギ達はそれぞれの技を打ち合い二人とも倒れているようです。

「引き分けですね……、ゼクトと詠春はナギの方へ」

「うむ」

「わかった」

さて、行くのでしょうか。

S i d e 刻亜

今、アル達とご飯を食べている。
30年ぶりの飯はめっちゃ旨い？

「改めて私は、アルビレオ・イマといいます。」

「ゼクトじゃ」

「青山詠春だ」

モグモグ…ゴックン

「俺は剣城刻亜だ、ご飯ありがとございました」

飯のお礼はちゃんとしなさいと、ばあちゃんに言われたからな。

「いえいえところで1ついいですか？」

「モグモグ……何だ？」

「先程使っていた力は何ですか？」

魔眼のことか？まあ教えても良いだろう。

「あれは時空の魔眼といって、時間旅行以外なら時と空間を自在に操れる力だ」

「バグですね」

「バグじゃな」

自分でも分かっているけど酷くない？

「それとさっきの剣は何なんだ？」

詠春がイクス・アンリの事を聞いてきた。

「ん？ああ、イクス・アンリの事か」

「そうだ、戦いの時形が変わった様に見えたんだが」

「この剣は簡単に言うと、絶対に壊れなく俺の想った形になる剣だ」

「持ち主がバグなら剣もバグですね」

「そうじゃな」

「そうだな」

君達さっきから本当に酷くない？まあ良いか。モグモグモグモグ……。

「ふぁわゝあれ？ここは？」

おつ、ナギが起きたみたいだな

「起きましたか、ナギ」

「おつ……ってアル！どっちが勝った！」

「両者戦闘不能で引き分けですよ」

「そうか……。それにしてもお前強いな！俺達の仲間にならないか
！」

ん？どうするかな？まあこいつらと一緒にいると楽しいからな。

「良いぜ、これからもよろしくな！」

「おつ！こちらこそよろしくな！」

こうして俺は、紅い翼に入った。

第3話 俺とナギとバトル（後書き）

今回も見てくださってありがとうございます！

戦闘描写はなかなか上手くならなくて大変です。

次話は出来るだけ早く投稿します！

これからも、時と空と空想とをよろしくお願いします。

第4話 鍋と麻婆とお月様（前書き）

遅くなってしまいました。

戦いなどはまだ駄文ですが…

第4話 鍋と麻婆とお月様

S i d e 刻 亜

俺が紅い翼に入ってからある程度だった。

いろんな戦場に行き戦いをを行い、そこで初めて人を殺した。

最初の2日は何も考えられなくなった。

けど、ナギ達にいろいろ言われた。

死に慣れるな、殺した事を忘れるな。そう言われ、何だか吹っ切れた。

そしてこの頃は、詠春とよく剣の修行を行う様になった。

やっぱり原作でラカンが言ってた通り、詠春は剣の腕がとてつもなく上手く、剣だけでは勝てない。

そして何故か俺は、紅い翼の大食い担当になってた。

あれか？泊まった宿の飯を一人で、ほとんど食いつぶしたからか？

それともみんなで飯を食べている時、時間停止で皆の肉を食べたからか？

町の大食い大会で、他の選手の飯まで食べたからか？

……まあいいか。称号に腹ぺこ王と付かなければいいな……。

そして今、俺達は鍋を食べている。

最初俺が別なのを作るはずだったんだけど、あのアルまでが止めにかかってきて、鍋にすることになった。

そんなに俺の料理嫌なのかな……、あつ！俺はどつかの、必殺料理人みたいに下手じゃなからね！

ただ、言峰印の麻婆豆腐を作っただけなのに……。

あれは普通に美味しいよ、よく二次創作で兵器と化してるけど、美味しいんだよ。

転生前はあの麻婆豆腐を作って食べたら、病み付きになったんだよな。

それを友達に食べさせたら、お前は言峰かつ！と言われたよ。

ちなみに、ばあちゃんも「う・ま・い・ぞー！」て言ってた。まあ今度誰かに食べさせるか……。

そんな事で鍋を食べている。

「んっふっふっこいつが旧世界は、日本の鍋料理って奴かあ」

「ナギ おまつ…、何肉を先に入れてるんだよ」

がっがっがっがっ！

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

がつつがつつがつつ！

「それと！刻亜っ！お前は早く食い過ぎだ、ちゃんと噛め！」

「ふっ、舐めるなよ詠春。俺は、高速で噛んで食べている」キリッ

パカンッ！

いって、おたまで叩くことなく？

まあ仕方ない、少し食べるスピード落すか……。1秒くらい。

「フフ……詠春、知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋將軍』と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーン！？」

「っ…強そうじゃな」

「鍋奉行じゃね？」

がつつがつつがつつがつつ！

「わかったよ…詠春、俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す、好きにするが良い」

「んー…嬉しくないなー」

だろうね。俺はこの鍋將軍に怒られない程度に食べよう。

「おお！何じゃこのソース！うまいぞ？」

が　　つ　　つ　　が　　つ　　つ　　が　　つ　　つ　　！

「ホントだ！うめえっ！」

「これこそが、日本の誇る醤油だよ」

「これが醤油か！スゲーうめえっ！」

「卵が欲しいな……、詠春持ってない？」

すき焼きといったら、卵だと思う。

「ん？卵？無いぞ」

そ　　う　　か　　……　　残念だ。

「姫子ちゃんにも、食わしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃん？だれだ？」

まあアスナの事だろう。それにしても、何か忘れているような？

「オスティアの姫巫女の事ですょ」

「ふーん」

「まあ……戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも……です」

「その戦だが…やはりどうにも不自然に思えてならん」

うーんなんだったっけ？思い出せん。

ドカツ！！

そう唸っていると、上から大剣が降ってきた。思い出した今日はジャックか！

「食事中失礼……ッ 俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！いつちよやろっぜッ」

肉が…白滝が…椎茸が…。まだ少ししか食べてないのに。

あの筋肉ダルマ……ユルサナイ

「お、おい……刻亜？」

「ク…ククククク…」

「フ…フフフフフ…」

「「食べ物を粗末にする奴は……」」

「万死に値する！」

「斬る」

瞬間に俺達は、ラカンに切り付けた。

「ちよっ、タンマタンマあんたらマジでつええな、ちょい待たね？」

何をほざくか、この筋肉ダルマ食の怨みは怖いんだよっ！

しかしこのバグめ、俺達の斬撃を凌いでやがる。

「ふざけるなっ、やる気なら本気をだせ貴様っ！」

ホントだよ……まあしかし、出してないうちに食の大切さをオシエテヤル。

「ぶるっ（なんだ？今悪寒が…）へっ、ソースか。けど5対1だし、本気出す訳にはいかんのよね。あんた達の情報はリサーチ済みだぜっ！？」

そう言うトラカンが、いかがわしい格好の精霊を4体呼び出した。

「情報その一。生真面目剣士はお色気に弱い」

精霊が詠春に纏わり付き、詠春を気絶させた。

敵国にも知られてるって詠春……どんだけだよ。

「ホイ、一丁あがり」

俺が居るという事を忘れるなよ？

「さあ、食の大切さの勉強の始まりだぁ！」

「情報その5、もう一人の剣士はオールマイティ弱点なし。特徴チート」

「へえチートって愉快だな帝国」

本気にもっと違う言い方無いのか？まあどうでもいいか。

「食の大切さ教えてやるよ！そら！開幕と行こう」

「おっ！？」

ジャラジャラジャラジャラ

俺は、空想具現化で作り出した鎖でラカンを掴む。

「オラオラオラオラオラッ！星の息吹よ！」

「ちっ、はっ、なんだあ！？」

ラカンを引き寄せ、空断之剣で6回斬り鎖で縛った。とどめだ。

「プルート・デイ・シュヴェスタア！！アハハハハハ！！砕ける
！！」

「っ！気合防御！」

ドガーーーーン！！

最後に月墮しを放ち、当たり一面更地になった。

「っは！今のはマジやばかったぜ」

月墮しを耐えるってホントにバグだな。一応真租の切り札だぞ。

「刻亜、こちらで余った鍋を食べましょう」

アルが言ってきた。ああ、腹減った。

がつつがつつがつつがつつがつつがつつが！

「して刻亜、さっきの月は何ですか？」

「ゴツクン。ああ、あれは空想具現化と言って、自然に介入して空想を具現化する能力だ、まあ俺のは少し違うけどな」

「それはまたバグですね」

「バグじゃな」

「そうバグバグ言っな、それにバグで言ったら今ナギと戦っている奴がバグだ」

「それもそうですね」

「そうじゃな」

そんなこんなで、ナギ達は13時間も戦い続けさらに更地になった。

第4話 鍋と麻婆とお月様（後書き）

第4話投稿だー？

刻亜「おい作者、何で俺は後書き《ここ》にいるんだ？」

それは……、後書きに何を書けばいいか分からなくなったからだ！

刻亜「駄作者め」

酷くない！？

刻亜「当然の事だろう」

ぐっ、まあそれはともかく、お前は言峰麻婆が好きなんだろ？

刻亜「ああ、あの辛さがうまいぞ！」

でも珍しいよな、昨今の転生者は言峰麻婆苦手だよな？

刻亜「そうだな……、ホントうまいぞ？食つか？」

食つか？。麻婆豆腐の事になると、言峰と話合いそうだな

刻亜「あと、立花奏とも語れそうだな」

あの娘も麻婆好きキャラか……。

じゃ今回はここまで。

刻亜「時と空と空想とを、これからよろしくお願いします」

じゃ次回まで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5224s/>

時と空と空想と

2011年11月10日20時29分発行